マイホビー マイライフ

古代ギリシア語の研究

片木　淳

古代ギリシア語の研究

早とちりされると困るのであるが、小生の現在の趣味が古代ギリシア語の研究というわけではない。20年後ぐらいに、ボケ防止を兼ねて始めようかなと考えているのである。ただ、かねてからそのための用意だけはしてある。ジェトロのデュッセルドルフ・センター勤務時代、ドイツ語による古代ギリシア語辞典、文法書それにホメロスの「イリアスとオデッセイ」の独希対訳版を購入、書棚の奥深く秘蔵してあるのである。

トロイとミケーネの遺跡を発見したシュリーマンは、語学の天才でもあり、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、スウェーデン語、ポーランド語、トルコ語、アラビア語、ペルシア語、ギリシア語をマスターしていたが、古代ギリシア語の勉強だけは、これを始めるとその魅力のとりこになって商売にさしさわるとのことで、一番後回しにしていたとのことである。彼は、これらのことばをひとつ大体6週間から8週間でマスターしたが、記憶力を習練した結果、20頁ぐらいの冊子であれば、3回注意深く通読しただけで、すべてを正確に丸暗記できたといわれている。あまり知られていないが、彼は明治維新直前の1865年日本を訪れており、毎日銭湯に入って頭のテッペンから足の爪先まで洗う日本人を「世界で一番清潔な民族」だと紹介してくれている。先年、国会図書館で同氏のフランス語による旅行記「現代の支那と日本、La Chineet le Japon ; au temps présent 1867」を見つけ、早速コピーをとって辞書を引き引き読み始めたが、忙しくなったので、これまた老後の趣味に追いやった。

コリント　アポロン神殿遺跡にて

鹿児島弁（カゴンマベン）と中国語

鹿児島には、5年もいたので、当時は天文館で「あたいも、ぢごろごわんさあ（わたしも土地の者です）。いけなこつごわんどな？ (How are you ?)」からはじまって店の女の子を30分ぐらいはだましとおせるぐらいの正調薩摩弁をはなせたものである。観光物産課長時代には、鎌田知事（現参議院議員）に全国に向けての観光宣伝予算をつけていただき、「ヨカ晩ナア」キャンペーンをはった。このことばももちろんカゴンマ弁であるが、鹿児島の人は、皆で焼酎を飲んで楽しく座がなごんでくると、連帯感を確かめるかのように「ヨカ晩ナア」を連発しあうのである。知事に「東京砂漠といわれる昨今、銀座では最近この潤いのあるカゴンマ弁がはやっておるとのことでございます。ぜひ全国的にはやらせて鹿児島観光の起死回生策としたい。」とお願いしたところ、たしか「それをはやらせた元は僕だよ。」といわれて全国初のテレビ・スポット予算がついたように記憶している。

当時、鹿児島県は、毎年香港で観光物産展を開催していた。ある中華料理店での話。知事が挨拶を終え、さあこれから議会代表の大物議員の音頭で乾杯にはいろうとしたところ、ビールが全然用意されていない。しかも、通訳をつとめるはずの県の現地駐在員譚福民氏がどこに行ったのか、いつのまにか消えている。「ビール、ビール」というが、なぜか下手な英語がまるで通じない。こちら側には、広東語をはなせる人はもちろんだれもいない。責任者としてオロオロするばかりであったが、窮余の一策で箸の紙の裏に漢字で数語書いて見せたら、即座にビールが届き、胸をなでおろしたことがある。紙片には、次のように書いてあった。

「至急始宴会　我欲麦酒　乾杯！」

後で、譚氏に聞いた所では、広東語には「至急」という表現はなく、こういう場合には、「快的（ファイテ）」と言うのだそうである。

ドイツ語とデュッセルドルフ弁

10年程前、ドイツのジェトロ・デュッセルドルフ・センター勤務を命じられた、その日に虎ノ門書房でドイツ語の文法書を買って早速ドイツ語の勉強を始めた。泥縄もいいところであるが、昔、マックス・ウェーバーが3週間でロシア語をマスターしたと聞いたことがあったので、赴任まで3ヶ月もあれば十分だろうと思ったからである。新宿のドイツ語学校でほんの基礎的なドイツ語だけをなんとか身につけて渡独した。さて、初出勤をし、ドイツの新聞を広げてみて「アッ」と驚いた。全く、一行も、理解できなかったからである。ショックでひどく落ち込んでいると、前任者の花見先輩（現市町村国際文化研修所副学長）が「心配するな。にらんでいたら、半年もすれば読めるようになる。」と慰めてくれた。そのとおりで、半年たったら大体のことはわかるようになったのであるが、つくづく語学の習得は、慣れだなと痛感した。

デュッセルドルフ市役所の壁には、カーニバルの頃ともなると、土地の方言でキャッチフレーズの垂れ幕がさげられるが、まるで意味がわ

からない。オランダからイギリスの方に連続的に伸びているいわゆる低地ドイツ語で、しかもフランス語が相当混入しているといわれるラインラントの方言だからとのことであった。

デュッセルドルフの郊外に瀟洒で美しいベンラーターという城がある。ドイツ語の歴史上有名な第二次子音推移といわれる現象は、ＡＤ500年頃に南のアルプス地方で始まり、何百年もかけて徐々に北上、このベンラートという町のあたりで止まった。これが有名なベンラート線 Benrater Linie である。この変化の結果ドイツ語と英語は次のように区別されることとなったのである。

p	→	pf	apple	→	Apfel	林檎
t	→	ts	tongue	→	Zunge	舌
p	→	ff	ship	→	Schiff	船
t	→	ss	water	→	Wasser	水
k	→	ch	book	→	Buch	本
d	→	t	dance	→	tanzen	踊る

土佐弁と坂本龍馬

司馬遼太郎氏によれば、日本で敬語のないのは、紀州と小生の生まれ育った泉州だけだそうである。子が親に対しても、部下が上司に対しても、友達に対するのと全く同じようにしゃべるのである。このようなこともあり、自治省から和歌山県に赴任した先輩諸氏の中にも、これで苦労した方が多かったようである。もともと、雑賀孫一に見られるように、反骨の反中央的な土地柄だという先入観のところへもってきて、部下が上司を上司とも思わないようなものいい（本人には、全く悪気はない。）をされたのでは、カルチャーショックも大きかろうというものである。

紀州弁は、これまた土佐弁によく似ている。高知の室戸岬あたりの人が紀勢本線に乗って旅をしていて目をとじると、本当に故郷を走っているかのような錯覚にとらわれるのだそうである。

小生が子供の頃、みなで大騒ぎをしているとよく「ほたえな！」としかられた。広辞苑にも載っているから、必ずしも泉州や紀州だけの方言ではなさそうであるが、実はこの言葉は、かの坂本龍馬が発した歴史的な言葉なのである。慶応３年11月15日、京都河原町の近江屋の階段を駆け上がって来た刺客にたいして、「ほたえな！」とどなりつけたのである。毎年、龍馬の33歳の誕生日でもあり、また、命日でもある同日、龍馬がその日食い損ねたシャモ鍋を、高知県食鳥肉衛生同業組合の招待で同県保健環境部長としてごちそうになったものである。徳川吉宗公が、紀州藩主時代、野良着の百姓衆に紀州弁で「毎日精出してくれるんやのう。おおきによ」と言う（津本 陽「大わらんじの男㈢」）のと同様、偉大な人物が自分の native language をしゃべってくれると親近感と敬愛の念が増すのを覚える。

英語とジョン・万次郎

土佐清水市中の浜のジョン・万次郎は、15歳のとき捕鯨船に助けられてアメリカにわたり、22歳までの間に英語をマスターして帰国したわけであるが、彼の実用英語には今日なお学ぶべき点が多い。「What time is it now？」は、彼流には「掘った芋いじるな」とルビをふってあったが、先年ニューヨークで日本で教える普通の発音と万次郎の発音とを試してみたら断然万次郎のものの方が通じ方がよかったそうである。日本の英語教育は、「I am a boy.」（誰がそんな質問をするか）などという現実と掛け離れた設定から始まって、アメリカの大学生にもわからんようなクイズまがいの試験問題を出して得意になっているんだから手に負えない。

幸い、自治省内にも、そのような議論が澎湃として起こり、ドイツから帰国後直ちに命を受け、生の英語教育を実施するため世界各国から外国青年を招致する事業に取り組んだ。「小さく生んで大きく育てよう」というのが当時の方針であり、たしか800人程でスタートしたが、いまや4,000人もの世界の青年が毎年日本を訪れるようになり、こどもたちに生の英語を教えてくれるようになったのは、ありがたい。

フランス語

デュッセルドルフへの赴任辞令をもらったときに、当時の大島靖大阪市長（現大阪国際交流センター会長）から歳を聞かれ、「36です。」と答えると、「ちょっと食い過ぎているな。もう間に合わんかもしれんが、英語、ドイツ語、フランス語の習得を命ず。それにスペイン語とイタリア語もできたら言うことはない。」（そりゃそうでしょ。）

ところが、前述のとおり半年ほど過ぎたところで、ある程度ドイツ語はできるようになってきたのであるが、ある日、朝から晩まで、新聞を読んでも、ドイツ人と話をしても、何から何まで全部完璧にわかる日があった。浅はかなものであるが、不遜にも、「俺はついにドイツ語をマスターした。」と錯覚、ひきつづき大島市長の命令を履行すべく、デュッセルドルフ市成人大学の夜間フランス語講座に入校したのである。

ろくにドイツ語もわからんのに、「次のフランス語をドイツ語に訳せ。」などといわれて苦労したが、いろんなヨーロッパ人の同級生たちと一緒に勉強していて、かれらがいかに楽に語学をマスターできるかよくわかった。

ヨーロッパは、狭いので本当に生の外国語を学びやすい土地柄であるのに加えて、つぎのように法則性のある単語も多いからである。

（英　　語）	society —— liberty
（フランス語）	société —— liberté
（スペイン語）	sociedad —— libertad
（イタリア語）	società —— libertà
（ポルトガル語）	sociedade —— liberdade

ロシア語と北海道

小生、大学時代の第二外国語はロシア語であるが、北海道に勤務するようになってからは、ロシア語が久しぶりに必要となり、ほんの基礎的な素養でも大いに役立ったものである。

カニ本位制といわれているが、北海道の稚内、小樽、根室、釧路等の港には、近年ロシア海域のいろんなカニを積んだ漁船が入港、これを売って得た日本円で自動車、電気製品等を買って帰る。

このようなこともあり、サハリン、沿海州を中心にロシア側との交流も盛んであり、道庁にもしょっちゅうロシアのお客さんが来る。また、北方四島とのビザなし交流も大事な道庁の仕事であり、小生も昨年5月国後島を訪れた。元島民の団員の中には、かなりの高齢者も多いのであるが、一同、配られた特製の日露会話集の適当な頁を指し示すことによってかなりの会話をしてくるのである。小生も、団長としての挨拶ぐらいは、昔とった杵柄でと、「Здравствуйте!（今日は）」などとやったところ、拍手喝采を受けたのはよいが、後で、ボキージン南クリール地区長から、「うちの幼い孫の発音そっくりだ。」と言われたのには、参った。今回の北海道東方沖地震で相当の被害が出たと聞き、たいへん心配しているところである。

たわいもない話で恐縮であったが、小生としては、ちょっとした時に仕入れた片言の外国語がたまに通ずると、妙に楽しいのである。

（自治省公営企業第一課長）